

ミステリ読書案内

2020. 1. 2 発行元

第 26 号 伊藤 剛

「このミス2020」を見て!

『このミステリーがすごい! 2020年版』が出た。今年のカミステリを振り返り、そして自分の読書を振り返る良い機会。『このミス2020』の記事を土台にして、少し考えてみよう。どんな年だったかな?

ベストテン作品、読んでいない!

毎年、同じことを思うのだが、「ベスト10」に取り上げられる作品を私は読んでいない。右表に『このミス・ベスト10』を載せてみた。私が読んだのはたったの2冊。今村昌弘の『魔眼の匣の殺人』と米澤穂信の『本と鍵の季節』のみ。

「ベスト20」まで広げても、青崎有吾の『早朝始発の殺風景』(12位)と早坂吝の『殺人者対殺人鬼』(17位)の2冊が増えるだけ。

ひとつには、お金がないので、ハードカバーの単行本は極力買わない方針で、文庫になるまで待つのが基本形だということ。そして、読んでいる作家、好みの作家に偏りがあるとのこと。

出版された本を全部読むのは無理

年間500冊読むと言っても、私が読んでいるのは中古書店でも買えるような何年か前に出たものが主で、新刊を全部読むなんて到底無理な話。

『このミス』の一番後の新刊リストでチェックしてみると、昨年1年間で私が読んだ新刊は92冊。新書判で西村京太郎が10冊。梓林太郎が4冊……。文庫本で書き下ろしが出た望月麻衣が6冊、ライト文芸系が20冊くらい……。

やはり、馴染みのあるシリーズものを中心に買っている。「この作家は全作品買うぞ」と決めている部分もあるので。

横山秀夫や宮部みゆきの作品は「後でゆっくり時間をかけて読みたい」と思ってしまう。

私が昨年読んだ本は……

昨年一番読んだ作家は誰だろう。堂場瞬一は随分溜まったので、文庫本をかなりこなし。中山七里や知念実希人も読み残しがたくさんになったので結構こなし。鈴峯紅也、麻見和史、富樫倫太郎、矢月秀作……などの警察小説・アクションにも手を広げた。これらは、『このミス』ランキングに登場しない作品群なので、他のマニアの人からは「なん

《『このミス』今年のカミステン》

1. medium 霊媒探偵城塚翡翠 相沢沙呼
2. ノースライト 横山秀夫
3. 魔眼の匣の殺人 今村昌弘
4. 罪の轍 奥田英明
5. 刀と傘 明治京洛推理帖 伊吹亜門
6. 紅蓮館の殺人 阿津川辰海
7. 欺す衆生 月村了衛
8. 昨日がなければ明日もない 宮部みゆき
9. 本と鍵の季節 米澤穂信
10. 潮首岬に郭公の鳴く 平石貴樹

だ。そんなカミステリを読んでいるのか」と軽蔑(?)されそうだが、私は私なりにカミステリ全体を大切にしようと考えている。

最新作の単行本で買ったもの

昨年私が買った、数少ないハードカバー本は、今村『魔眼』、米澤『本と鍵』以外に、逢坂剛の『百舌落とし』、小路幸也の『アンド・アイ・ラブ・ハー』、石田衣良『絶望スクール』、中山七里『もういちどベーターヴェン』、今野敏『炎天夢』、渡辺裕之『砂塵の掟』などといったところであろうか。実力が既に保障された作家たち。

こうしてみると、私は「読書のプロ=カミステリ通」には向いていない読者なのだと思う。まあ、意識して新刊単行本を読めば、できないことはないのだと思うが……。

「このミス」9位 米澤穂信『本と鍵の季節』

今回の『このミス』ベスト10の中の9位に入っている、米澤穂信の『本と鍵の季節』を紹介する。一昨年12月の発行の話題作で、出版直後、朝日新聞の書評欄には2回も取り上げられた。

高校の図書室で二人の図書委員が謎に取り組む短編集。持ち込まれた問題に、二人が会話をしながら推理を積み重ねていく。その会話というか、流れの見事さというか、「さすが米澤穂信」と思わせてくれる。着眼の妙、推理の持って行き方、真相が判明した後の独特の後味。さすが! 「学園もの」としてたくさんのライト系カミステリもあるが、米澤の作品はレベルの違いを感じさせる。作者の人間性の奥深さがよくわかるのだ。『このミス』で毎年上位にランクされるようになったので、どの作品も素晴らしい。

私は、米澤穂信作品を『氷果』から始まる“古典部”シリーズ、そして『春期限定いちごタルト事件』からの“小市民”シリーズと読み続けてきたので、今後の活躍に期待するところが大きい。たぶん、どこかの号で米澤特集を組むことになるだろうし、長編『インシテミル』も単独で取り上げる予定である。